

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18520019  
 研究課題名（和文） 二十世紀分析哲学の総括とその将来的意義の歴史的・体系的解明  
 研究課題名（英文） An Overview of the 20th Century analytic philosophy and its historical and systematic examination  
 研究代表者  
 松阪 陽一 (MATSUOKA YOICHI)  
 首都大学東京・人文科学研究科大学院・准教授  
 研究者番号：50244398

## 研究成果の概要（和文）：

われわれは本研究において、20 世紀における分析哲学、特にフレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタイン、クワインの哲学的見解の射程と重要性を見積もった。特に、フレーゲにおける論理主義の概念、ラッセルの命題概念と記述の理論、ウィトゲンシュタインの構成主義的数学観、そしてクワインの自然主義が現代の哲学にどのような影響を与えているのかを分析し、彼らの枠組みを如何にして越えて行くべきなのかを検討した。

## 研究成果の概要（英文）：

We examined the scope and the importance of major figures in the 20<sup>th</sup> Century analytic philosophy, especially Frege, Russell, Wittgenstein, and Quine. In particular, we examined the modern significance of Frege's logicism, that of Russell's notion of singular propositions and his theory of descriptions, that of Wittgenstein's constructivist view of mathematics, and that of Quine's naturalism. We also investigated how we could get over their possible limitations.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

## 研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：哲学、西洋哲学、論理学、意味論

## 1. 研究開始当初の背景

われわれが本研究を開始した時点での分

析哲学研究の世界的傾向として、分析哲学の歴史への関心が高まりつつあったという

ことが挙げられる。21世紀の初頭は、「フレーゲ・ルネッサンス」とも呼ばれるフレーゲ研究の興隆は言うに及ばず、ラッセル、ウィトゲンシュタインといった哲学者たちについても、その遺稿等の分析を通して様々に興味深い研究が現れ始めた時期でもあった。

## 2. 研究の目的

(1)上記の1.で記述した背景を踏まえ、日本においてもまた、フレーゲやラッセル、ウィトゲンシュタイン、クワインといった人々残した遺産の射程を見積もり、それらが21世紀の哲学研究に対して与えてくれる方向性を模索することを目的として、われわれの研究は開始された。

(2)研究代表者の松阪はラッセルの命題概念の解明を目指した。

(3)研究分担者の野本は、フレーゲの思想概念の解明を目指した。

(4)研究分担者の丹治は、クワイン、デイヴィドソンの自然主義概念の解明を目指した。

(5)研究分担者の岡本は、ウィトゲンシュタインにおける構成主義の解明を目指した。

## 3. 研究の方法

(1)主に研究代表者の松阪が、各研究分担者の研究に必要な図書、機材等を集約し、その実際の購買、収集にあたった。

(2)毎年秋に研究合宿を開催し、外部からの講師を招くことで研究の遂行に必要な外部知識の吸収した。

(3)上記研究合宿で、各自の研究の進捗状況並びに成果を互いにチェックしあうための場とした。

## 4. 研究成果

(1)松阪の論文③は、ラッセルの命題概念と深く関わりをもつ記述の理論とその認識論的前提がもつ現代の言語哲学に対する影響を見積もり、いかにすればラッセル的な枠組みを越え出ることが可能になるのかを考察した試みである。

(2)野本の論文②は、フレーゲの思想概念と密接な関わりをもつ論理主義を解明するために、フレーゲ以外の論理主義的思想傾向の持つ特徴を明らかにしようとした試みである。

(3)野本の論文⑧は、フレーゲが自らの思想概念を必要とした背景として、その論理体系の解明を目指した試みである。

(4)丹治の発表⑤と論文⑥は、クワインやデイヴィドソンの自然主義の内部で、その位置づけが難しいと思われる意識の概念が、いかにして自然主義的に理解可能なのかを考察した試みである。

(5)岡本の論文⑦は、ウィトゲンシュタインが抱いていた構成主義的数学観とも関わりが深い、領域理論のもつ哲学的意義を意味の観点から考察した試みである。

(6)岡本の発表②は、フレーゲの見解にすでに構成主義的観点が多分に含まれていることを論じた試みである。

(7)岡本の発表①は、フレーゲとウィトゲンシュタインが抱いていた数学的思想が、いかにして現代哲学の形成を促したのかを明らかにする試みである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

①松阪 陽一、「決定論と行為の自由」、『人

文学報』第429号、1-24、2010（査読無）

②野本 和幸、「R. デデキントの数論：  
（1）「無理数論」——論理主義の一出発点」、  
『創価大学人文論集』第22号、2010、  
（1）-（35）（査読無）

③松阪 陽一、「指示と意図」（『岩波講座 哲  
学〈3〉言語/思考の哲学』岩波書店 2009年  
p. 15-42）（査読無）

④松阪 陽一、「テキストからの展望 フレ  
ーゲ『意義と意味』」、『岩波講座 哲学〈3〉  
言語/思考の哲学』岩波書店 2009年 268-272  
頁（査読無）

⑤松阪 陽一、「テキストからの展望 ラッ  
セル『表示について』」、『岩波講座 哲学〈3〉  
言語/思考の哲学』岩波書店 2009年 272  
-276頁（査読無）

⑥Tanji, Nobuharu, "Consciousness and  
Evolution", Proceedings of the KSPS 2007  
Annual Conference, Korean Society for the  
Philosophy of Science, pp. 1-7, 2007.（査  
読無）

⑦岡本 賢吾、「なぜ意味論はプロセスを含  
むか —— 表示意味論・領域理論をめぐ  
って」『科学哲学 vol. 40-2』日本科学哲学会  
編、2007年12月（査読無）

⑧Nomoto, Kazuyuki "The Methodology and  
Structure of Gottlob Frege's  
Logico-philosophical Investigations,"  
Annals of Japan Association for Philosophy  
of Science, vol. 14. no. 2, pp. 1-25, 2006. 3.  
（査読有）

〔学会発表〕（計5件）

①岡本 賢吾、「数学者たちが切り開いた現  
代哲学 —— 数学と哲学の interplay の射程  
を探る」、「社会に数理科学を発信する次世  
代型人材創発」ラウンドアップフォーラム、  
2010年3月20日、明治大学

②岡本 賢吾、「Why Read Frege from  
Constructivist Viewpoint?», Workshop on  
Constructivism: Logic and Mathematics,  
2008. 5. 29（北陸先端科学技術大学院主  
催による国際ワークショップでの招待講演）。

③岡本 賢吾、竹内泉、「数学に於ける変数  
（2）」、日本科学哲学会第41回大会（福岡大  
学）2008年10月18日

④松阪 陽一、「フレーゲの「文法」と意義  
の構造」（招待講演）、「哲学系若手研究  
者育成プロジェクト」研究会：「結局「意義」  
とはいったい何なのか—ダメット版フレ  
ーゲの再検討」、2007年1月13日、京都大  
学文学部東館

⑤Tanji, Nobuharu, "Consciousness and  
Evolution", Korean Society for the  
Philosophy of Science, (2007年7月3日、  
ソウル国立大学における招待講演)

〔図書〕（計2件）

①日本科学哲学会編、野本 和幸責任編集・  
岡本 賢吾、松阪 陽一(他11名)著、『分析  
哲学の誕生：フレーゲ・ラッセル』勁草書房、  
2008 [松阪執筆部分 257-276頁、野本執筆部  
分 1-34頁、51-76頁、岡本執筆部分、  
143-176頁]

②飯田隆編、岡本 賢吾(他13名)著、『哲学  
の歴史11 論理・数学・言語』中央公論社、  
2007年4月 [岡本執筆部分、281-344頁]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松阪 陽一 (Matsusaka Yoichi)  
首都大学東京・人文科学研究科大学院・  
准教授  
研究者番号：50244398

### (2) 研究分担者

野本 和幸 (Nomoto Kazuyuki)  
創価大学・文学部・教授  
研究者番号：70007714

丹治 信春 (Tanji Nobuharu)  
日本大学・文理学部・教授  
研究者番号：20112469

岡本 賢吾 (Okamoto Kengo)  
首都大学東京・人文科学研究科大学院・  
教授  
研究者番号：00224072